

東北ヘルプ 「グランドハウス・プロジェクト」

第二年度1～3月報告書

1. 概 要

1-1. 現 状 1-2. 展 望 1-3. フクシマ

2. 各地の支援センターによる支援活動

- 2-1. 宮城県仙台市若林区への支援 (若林支援センター・「若林ヘルプ」)
- 2-2. 宮城県石巻市「開成」仮設住宅への支援 (石巻支援センター・「出前寺子屋」)
- 2-3. 岩手県盛岡市での支援活動 (盛岡支援センター・「ハートニット」)
- 2-4. 宮城県南三陸町への支援 (南三陸支援センター・「南三陸を支える判事者ネットワーク」)
- 2-5. 青森県青森市での支援活動 (青森支援センター・「青森クリスチャンセンター」)
- 2-6. いわき市への移住者への支援 (いわき支援センター・「いわきCERSネット」)
- 2-7. 名取市内仮設住宅への支援 (名取支援センター・「やまちゃんサービス」)
- 2-8. 相馬地域仮設住宅への支援 (相馬支援センター・「福島県キリスト教連絡会」)

3. センター・オフィスによる支援活動

- 3-1. 支援者による会議の開催
- 3-2. 世界への情報発信

4. 今後に向けて

- 4-1. 各センターにおける支援活動
- 4-2. センター・オフィスにおける支援活動

1. 概要

2013年3月時点における東北三県の避難民の状況は、以下の数字から知られるとおりである。

a. 仮設住宅への避難者入居戸数	52,305戸
b. 被災者向け公営住宅への避難者入居戸数	5,222戸
c. 政府補助による賃貸住宅への避難者入居戸数	54,808戸

東北ヘルプは、現場の支援センターと中央のセンター・オフィスの両極構造を以て、被災地の変化に対応し支援活動を円滑に展開するグランドハウス・プロジェクトを行っている。このプロジェクトは、2013年1月より、第二年度下半期を迎え、第二年度上半期の活動を継続しつつ、第三年度に向けての検討を進めた。

以下、各支援センターの活動から知られた被災地の現状を総括し、第三年度を目指す方針を記し、特に福島の問題を記すこととする。

1-1. 現状

阪神淡路大震災以来、災害後の社会状況を研究し続けた似田貝 香門氏（東京大学名誉教授）に直接伺ったところによると、震災への関心は第三年目から急速に低下する傾向があるという（似田貝氏は我々の「ハートニット・プロジェクト」に高い評価を与え、助言者となってくださっている）。

しかし、現状、まだボランティアに参加する人数は（減少傾向にありながらも）持続しており、「ハートニット」の売り上げもまだ鈍化していない。ただし、支援者の疲労と倦怠は進んでおり、また、被災者も、変化のない現状に苛立ちを覚えている。

事実、被災地の現状は変化に乏しい。行政府は法律体系を震災前のまま変更しなかった結果、一つ一つの復興施策に膨大な手続きを要している。ただし、この問題は、昨年末の政権交代の後、急速に変化を見せ始めている。

1-2. 展望

以上の状況から、以下のようにして新年度への展望を拓くことができる。

1-2-1. 教会や寺院の活用

変化は首都・中央で起こり、現地・周縁に波及する。その時間差に、被災者は苛立ち、苦しむ。遠隔にある中央と直結しつつ、現場である被災現地に密着している組織こそ、教会であり、寺院である。

我々はエキュメニカル・ネットワークを基盤とする支援組織であり、また、各種仏教団体とも良好な関係を維持している。この特徴を活かし、教会や寺院の支援活動と協働し、各個教会・寺院を結びつけることで、その働きを支援することができる。そのためには、各個教会・寺院からの信用が必要となる。現在行っている短期保養プロジェクト等は、そのために資するものとなるだろう。

1-2-2. 支援者間の情報共有

遠隔にいる支援者は、今もなお支援の思いを抱き、情報を求めている。現地に働く支援者は、疲労と倦怠に抗うべく、労を共有する協働者との連帯を求めている。

グランドハウス・プロジェクトは、各地の支援センターの連帯を核として、現地に働く支援者の連帯を生み出すことができる。また、センター・オフィスに集まってくる情報を整理統合し、遠隔にいる支援者に届けることができる。現在我々が行っているホームページ運営・ニュースレターの発行・国内外での講演・現地支援者の会議は、そのために資するものとなるだろう。

1-2-3. 組織の再編成

被災地の状況は変化しつつある。行政府は体制を整えつつあり、これまで支援団体が担ってきた多くの活動は、あと一年以内に行政府によって担われるようになることが予想される。しかし他方で、人々の不安と孤立に応じる働きは、今後も求められて行く。今次の震災は規模が巨大であり、行政の支援からこぼれる人々は無数に生まれることが予想される。そうした人々への対応ができるならば、我々は世界に対して新しい一つの支援モデルを示すことができるであろう。

以上のことを踏まえ、来たるべき新しい状況に向けて、東北ヘルプは組織を再編成している。「グランドハウス・プロジェクト」に関連して言えば、これまでの支援活動を整理し、プロジェクトごとに様々な支援団体からの資金援助を獲得できるようにした上で、「グランドハウス・プロジェクト」そのものは、それらの統括機能に特化したものとする。また、これまでの実績を整理し活用することで、国内募金体制を強化することを目指している。

1-3. フクシマ

2013年2月13日、福島県民健康管理調査の結果報告が、福島県立大学から発表された。その報告によると、小児甲状腺癌が、「100万人に一人程度」であった通常と比して、10倍から600倍の発症件数となっているという。ただし、この報告は情報開示が徹底的に不十分であり、また、この「通常」の数字も、根拠があいまいであることが強調されている。すなわち、原子力発電所爆発事故の影響について、現状、誰も確たることが言えないということがわかる。

他方で、チェルノブイリ事故の報告によれば、事故後4年目に、放射線による健康被害が顕在化するという。現在は「事故後3年目」であり、来年度に破局的状況が到来することを危惧する声を無視することができない。

以上の現状は、グランドハウス・プロジェクトの第二年度下半期および第三年度の課題を示している。その課題とはすなわち、地域に密着した支援センターを支え、その情報を収集整理統合するセンターオフィスの機能を最低限維持することで、「事故後4年目」に不測の事態が生じた場合に機動的に対応することができる体制を保持することである。

2. 各地の支援センターによる支援活動

2-1. 若林支援センター・「若林ヘルプ」

2-1-1. 概況

仙台市若林区は今次の津波被害で最大の被害を受けた地域の一つである。3千戸の復興住宅が建設予定であるが、未だ50戸しか完成していない。

グランドハウス・プロジェクトは、その最初に、仙台市内にセンター・オフィスを設立し、また同時に、仙台市内の仮設住宅に支援センターを設立した。その支援センターは「若林ヘルプ」と名付けられ、自立した組織となった。現在、「若林ヘルプ」と協働して進展してきた仙台市内の活動は、被災者自身の自助組織や教会・ソーシャルワーカーの働きへと引き継がれる移行期間にある。センター・オフィスは引き続き若林ヘルプ並びに被災者による自助組織及び教会・ソーシャルワーカーと連帯し、支援を進めることとしている。

2-1-2. 教育支援

毎週2回、被災した小学生を集め、大学生のボランティアを組織して教育支援を行っている。この支援活動は子どもたちの親の連帯を生み出し、新たなコミュニティの基盤となりつつある。1月から3月までに行った支援の受益者数は以下の通り。

1月	8回実施	参加者累計	108名
2月	8回実施	参加者累計	110名
3月	6回実施	参加者累計	82名



2-1-3. 内職支援

2011年末以来、仮設住宅に住んでいない被災者も集える集会場を安価で借り出し、その集会場で被災者の内職支援を行い、以て新しいコミュニティを創り出しつつある。尚、内職の収益は全て参加した被災者が得ている。その成果は以下の通り。

1月	だるま制作	収入	245,000円
2月	七夕飾り制作	収入	25,746円
3月	七夕飾り制作	収入	16,200円



2-1-4. カウンセリング・マッサージ

ボランティアで専門家を呼び（交通費のみグランドハウス・プロジェクトで負担）、カウンセリング・マッサージを被災者に行った。その実施回数及び受益者は以下の通り。

1月	1回	31人
2月	8回	42人
3月	1回	33人



2-1-5. 個別訪問による相談業務

仙台市若林区を中心に活動している塩釜聖書教会の支援団体「ホープみやぎ」と協働し、以下の通り、仮設住宅に住む被災者を戸別訪問し、相談業務を行った。

巨理地区仮設住宅への訪問（1/26, 2/15）

めんつゆ1L×50世帯分をお持ちし、訪問時のお土産とした。

若林区「ニッペリア」仮設住宅への訪問（1/25-26, 2/15-16）

お茶菓子300円×60世帯分をお持ちし、訪問時のお土産とした。

七ヶ浜地区への訪問（仮設以外の家屋訪問2/6-7、仮設住宅訪問2/13,16,19）

支援がほとんどない15世帯の仮設以外の住居にコメ5kgをお持ちし、訪問による相談活動を行った。また、同地区の仮設住宅集会所へ訪問する際、めんつゆ1L×60世帯分をお土産とした。



2-1-6. 「アグリパートナーズ」支援

若林区内の仮設住宅に住む津波被災者を中心に、津波被災地で農業を再び始めようと、新しい組合組織「アグリパートナーズ」が結成された。グランドハウス・プロジェクトは日本国際飢餓対策機構と協働し、この組合組織の拠点となる納屋を購入・設置した。



2-1-7. 「若松会」支援

仮設住宅ではなく、一般民間賃貸住宅へと移住した若林区内の被災者が、「若松会」という組織を結成した。この会の集会におけるお弁当代の支援を行うことで、組織の運営を補助した。



2-2. 宮城県石巻市「開成」仮設住宅への支援

(石巻支援センター・「出前寺子屋」)

2-2-1. 概況

グランドハウス・プロジェクトは、NGO「出前寺子屋」と協働し、最も甚大な津波被害を蒙った石巻市内にある仮設住宅にて、教育活動を通じた支援活動を行っている。その仮設住宅の名前は「開成工業団地仮設」と言い、2012年12月時点で、1104世帯、約4000人が入居している。

この仮設住宅における我々の活動は、年間を通して以下のようにまとめられる。

(1)月に2回の漢字学習と英語学習のスクーリングを行っている。

(2)年に3回の漢字検定試験と、年に2～3回の英語検定試験を実施している。

(3)被災者に心の安らぎを持たしてくれる課外活動として、月に1回フラワー・アレンジメント等を行っている。

これらの活動を通して、被災者が自らの力で立ち上がろうとしていることをスタッフの皆が感じている。

過去4回の漢字検定の実績は受験者68名中合格者が56名(小中学生19名、一般37名)、過去3回の英語検定の実績は受験者13名中合格者12名(小中高生9名一般3名)、となっている。

上記の検定試験合格により「成長を実感している」と述べられ、仮設住宅での生活の中で生きていく自信を回復している成人受講者が2013年3月に実施した聞き取り調査において複数出現している。下記のケースはその聞き取り調査の事例である。

ケース①：出前寺子屋で漢検3級、準2級、2級と順に合格し、現在準1級を学習中のOMさんは「これまで見たことのない漢字が出てきたり、知らなかった読み方をしたりして、漢字はなかなか覚えられないけれど、少しずつ自分の成長を実感している」と語る。

ケース②：出前寺子屋で漢検準2級、2級と順に合格し、現在準1級を学習中のAKさんは「漢字の練習は特に音読みが難しい。だけど、漢字を覚えるのは楽しいし、成長も実感している」と語る。

ケース③：出前寺子屋で漢検準2級、2級と順に合格し、現在準1級を学習中のOKさんは「毎日をストレスのない生活をしたい。寺子屋での勉強はそういうイライラのストレスをリフレッシュしてくれる。成長も実感している」と語る。

上に記述した英検・漢検の合格後も中学3年生は寺子屋にて学習を継続し、希望の県立高校に見事合格し、高校3年生は英検合格後も学習を継続して公立大学の合格を果たしている。その他の参加者の様子は以下の通りである。

①3人の中学3年生は、2012年11月に寺子屋で英検3級、漢検3級及び2級の合格を果たす。その後も高校受験までの期間、学習を継続することを3人は希望した。そこで、AIM学習セミナーの冬期講習テキストを贈り、スクーリング時には受験英語の授業を臨時に行った。この中学3年生達にとり、12月、1月、2月の3カ月間は「寺子屋受験塾」であった。寺子屋での学習を受験対策に切り替えたことが功を奏し、宮城県立高校の前期試験(2月)と後期試験(3月)で皆志望校の合格を果たしたのであった。

②1人の高校3年生は、英検準2級合格後も英検2級の学習を受験勉強と並行して続け、センター試験を受け、3月には公立大学の合格を果たした。女川町の自宅は流失し、高校は避難所になり、経済的に予備校に通う余裕はなかったので、大学受験は苦戦をした。しかし、寺子屋に講師として参加する東北大生からのアドバイスが適宜に役立ち、公立大学の国文科合格に繋がった。高校で国語の教師をしたいという彼女の夢は震災により挫けることはなかった。

3月の教育支援活動の日、3人が皆第一希望の高校に合格し、1人が希望大学に合格したことを報告すると、その場にいた受講者全員が大きな拍手をおくり、祝福をしてくれた。寺子屋の受講者皆が受験生を気にかけて、応援をしてくれていたのだから。そこには素晴らしい連帯感が生まれていた。

2-2-2. 支援活動の詳細

・1月～3月のスクーリング参加者の状況

月日	1/13	1/26	2/9	1/12	3/10	1/8
回数	37	38	39	40	41	42
受講生	33	21	27	32	28	23
内訳男子	9	7	9	11	10	10
内訳女子	24	14	18	21	18	13
内訳学生	21	11	16	20	17	16
内訳一般	12	10	11	12	11	7
スタッフ	4	3	4	4	5	4

2-3. 岩手県盛岡市での支援活動（盛岡支援センター・「ハートニット」）

2-3-1. 概況

岩手県には、未だ19,139戸の仮設住宅に暮らす住民がいる。岩手県沿岸部の高齢女性を中心に、編み物を通して心身を癒し、また、編み物の技術の向上を待って製品を販売し、その収益を全て被災者へ還元するプロジェクトを、NGO「ハートニット」と共に進めている。



2-3-2. 支援活動の詳細

1月から3月の間に、下記の通り支援活動を行った。

- 編み物指導の集会 を44回行った。
- バザー及び販売会 を131回行った。
- 取材を27件受けた。
- これらの活動により、6,086,658円の売り上げがあり、被災者にすべて届けられた。



2-4. 宮城県南三陸町への支援（南三陸支援センター・「南三陸を支えるキリスト者ネットワーク」）

2-4-1. 概況

住民の約半数が死亡した南三陸町に、「南三陸を支えるキリスト者ネットワーク」が立ち上がった。グラウンドハウス・プロジェクトは、このネットワークと協働し、この地域の人々への訪問活動と催事の開催補助を行い、岩手の「ハートニット」の移植作業を進めた。

2-4-2. 支援活動の詳細

1月から3月までの活動は、以下の通りまとめられる。

1月

日	内容	関わり場所	訪問件数（戸）	受益者数（名）
4	イベント	横山幼稚園跡仮設	24	32
5	イベント	中学校仮設住宅		17
8	訪問	自宅	1	11
12	ハートニット	中学校仮設住宅		2
12	訪問	中学校仮設住宅	3	6
12	ハートニット	旭が丘集会所		11
12	訪問	自宅	1	3
13	イベント	センター		7
16	訪問	仮設自宅	2	6
16	訪問	仮設自宅	4	11
16	訪問	職場	2	12
17	イベント	施設		43
17	訪問	自宅	1	3
18	ハートニット	旭が丘集会所		14
18	ハートニット	中学校仮設住宅		2
22	イベント	保育園		21
22	イベント	役場		24
25	ハートニット	旭が丘集会所		14
25	ハートニット	中学校仮設住宅		3
29	訪問	自宅	1	9
30	イベント	旭が丘集会所	49	11
31	イベント	旭が丘集会所		71

2月

日	支援内容	関わり場所	訪問件数（戸）	受益者数（名）
3	イベント	センター	0	42
5	イベント	小森仮設	48	7
7	イベント	小森仮設		10

5	ハートニット	旭が丘集会所		13
8	ハートニット	中学校仮設住宅		2
10	イベント	センター		7
12	ハートニット	旭が丘集会所		10
12	訪問	山の神平	1	2
12	訪問	童子下仮設	2	4
12	訪問	入谷小学校仮設	1	3
12	訪問	グループホーム		7
12	訪問	岩沢地区仮設	38	11
15	ハートニット	中学校仮設住宅		3
15	訪問	中学校仮設住宅	2	5
19	ハートニット	旭が丘集会所		14
22	ハートニット	中学校仮設住宅		6
23	イベント	保育園		7
25	訪問	自宅	4	17
26	ハートニット	旭が丘集会所		11
26	訪問	戸倉中学校仮設	2	5
27	イベント	戸倉中学校仮設	67	32
28	訪問	自宅	1	12
28	イベント	センター		3

3月

日/月	支援内容	関わり場所	訪問件数 (戸)	関わり人数 (名)
1	訪問	仮設住宅	1	3
1	訪問	横山幼稚園跡仮設	2	5
1	訪問	袖浜仮設	1	2
1	訪問	袖浜		22
1	イベント	旭が丘集会所		32
2	イベント	中瀬地区仮設		21
2	訪問	イオン跡地仮設	2	2
5	ハートニット	旭が丘集会所		14
5	訪問	荒砥仮設	30	14
7	訪問	平貝地区仮設	44	10
8	ハートニット	中学校仮設住宅		8
11	イベント	センター		43
12	ハートニット	旭が丘集会所		14
12	訪問	イオン跡地仮設	1	3
13	訪問	袖浜		27
15	ハートニット	中学校仮設住宅	2	3
19	ハートニット	旭が丘集会所		11

22	訪問	さんさん商店街	1	3
22	ハートニット	中学校仮設住宅	2	7
22	訪問	小森仮設	48	8
22	訪問	田尻畑仮設	12	2
22	訪問	廻館仮設	35	10
23	イベント	小森仮設		9
23	イベント	田尻畑仮設		13
23	イベント	廻館仮設		21
24	イベント	センター		8
24	イベント	平貝地区仮設		14
24	イベント	荒砥仮設		7
26	カフェイベント	中学校仮設住宅		21
28	カフェイベント	センター		25
30	イベント	イオン跡地仮設		40

2-5. 青森県青森市での支援活動

(青森支援センター・「青森クリスチャンセンター」)

2-5-1. 概況

原子力発電所から放射性物質が放出され続けている。とりわけ3月12日以降起こった一連の爆発事故によって、土壌が汚染され、汚染された土壌は汚染された塵を巻き上げ、その塵によって、とりわけ子供たちの内部被爆が心配されている。

発災時、福島県下の18歳未満人口は36万人に上るといふ。その内の5万人程度しか、福島県外へ避難していない。人々は被爆の不安を抱えつつも、汚染された大地の上で生きていかざるを得ないのが現状である。

東北ヘルプは、福島県を中心に、放射能による健康被害に不安を覚える親子を短期保養させる支援事業を、「青森クリスチャンセンター」と共同で行った。この事業は3月までに福島県内の教会に引き継がれることとなった。従って1月から3月までは、その移行期となる。

支援は、以下の手順を追って展開した。

- a. 短期保養を希望する被災者は、担当する牧師と面談する。
- b. 担当者はセンター・オフィスに支援の必要を報告する。
- c. センター・オフィス担当者に一世帯2万円の交通費補助を預ける。
- d. 担当者は被災者に直接交通費補助を手渡し、保養終了後、その報告を受ける。

以上の手続きを経て、地域の牧師と被災者が結びつき、単に保養によって不安を和らげるだけではなく、将来にわたって信頼関係を構築し、深刻な健康被害が懸念される来年に向けた備えとなることが期待される。

2-5-2. 支援活動の詳細

日付	世帯数	目的地
11/13	9	青森
1/30	9	青森
1/30	7	岩手

1/30	9	会津
1/30	9	静岡
1/30	20	岩手
2/21	1	大阪
3/5	1	栃木県那須町
3/5	1	栃木県那須町
3/5	1	宮城県仙台市
3/5	1	福島県裏磐梯
3/5	1	宮城県村田町
3/5	1	福島県磐梯熱海
3/5	1	福島県磐梯熱海
3/5	1	宮城県仙台市
3/5	1	東京都
3/5	1	岩手県錦秋湖
3/5	1	会津方面
3/11	1	埼玉県川越市
3/11	1	沖縄県
3/14	10	東京ディスプレイ
3/26	1	岐阜県
3/26	1	沖縄県
3/26	1	新潟県
3/26	1	奈良県
3/26	1	奈良県
3/26	1	東京方面
3/26	1	東京方面
3/26	1	宮城県仙台市
3/26	1	山形県米沢市
3/26	1	宮城県仙台市
3/26	1	東京都
3/26	1	東京都
3/28	1	東京都

2-5-3. その他

保養の支援事業は、多くの団体が担っている。諸団体の連絡と協調のための会議に、グランドハウス・プロジェクトは、職員を派遣した。またそのネットワークから、保養の相談を担当者が受付けている。その報告は以下のとおりである。

- a. 2月いわき市相談会において、会場への来会者数は、約200名であり、受付け相談件数は、30家族であった。
- b. その後、個別相談受付け（メール等）件数は、20家族となった。
- c. 1～3月トータル相談件数は、50家族であった。
- d. 相談内容は、従来の母子保養の相談に加えて、思春期の子供の健康や将来の不安から子供のみで寄宿舎タイプの保養相談がみられ、原発事故の長期化のため、さらに状況は深刻になっている。問うプロジェクトの保養事業もネットで見て、相談会開催を心待ちにしていたという方も多く、安心できる環境でのホームステイのニーズの高さを感じました。

2-6. いわき市への移住者への支援

(いわき支援センター・「いわきCERSネット」)

2-6-1. 概況

原発被災者の多くが、いわき市内に避難してきている。その総数は2000人を超える。その被災者の中から、「浪江ピースの会」が誕生した。その集会場を提供し、岩手から「ハートニット」を委嘱し始める支援を、いわきの教会ネットワークと協働して展開した。

2-6-2. 支援活動の詳細

集会場を開放し、「ピースの会」が自由に集まれるように配慮した。結果、1月から3月までに、延べ76名が集まり、情報交換等を行った。

2-7. 名取市内仮設住宅への支援.

(名取支援センター・「やまちゃんサービス」)

2-7-1. 概況

名取市内では、被災者が8カ所ある仮設住宅に910戸入居している。ソーシャルワーカーである八巻正治氏が主催するNGO「やまちゃんサービス」と協働し、名取市内の仮設住宅で相談事業を行った。

2-7-2. 支援活動の詳細

3月2日、二つの仮設住宅集会場にて、アジア学院からの届けられたお米を配布しつつ、被災者の相談に応じた。

2-8. 相馬地域仮設住宅への支援

(相馬支援センター・「福島県キリスト教連絡会」)

2-8-1. 概況

原子力発電所爆発事故による立ち入り禁止地域の北側に位置する相馬地域には、原発爆発事故の被災者と津波の被災者が共に仮設住宅に避難して過ごしている。この地域には12,000人以上の原発事故による被災者が避難している。この地域の仮設住宅を訪問するために、福島県キリスト教連絡会と協働して、一人の牧師を専従者とし、生け花教室とカフェを一つにした「お花カフェ」などの催事などを行っている。

2-8-2. 支援活動の詳細

1月18日(金) 柚木仮設住宅 「お花カフェ」 10時～1時

参加者 52名

担当者の所見：当日の準備は仮設の方々にまかなわれたことは感謝でした。とても寒い中なのに喜んで参加し準備をしてくれた。参加者の中に7名の男子もあり、うれしそうに交わりに参加し、おかわりもしてくれた。おろし餅をたかと餅と言う、餡餅がうれしいとか、小正月ということもあって女性たちの休息にもなったとのこと。準備した者にとっても楽しいひと時となった。

昼頃、満足を得た方々に葛西師からの談話も加わり、楽しいおしゃべりタイムとなり喜びも増したことだ。今後の訪問活動も期待された。



2月8日(金) 「お花カフェ」新地がんご屋仮設住宅 15～18時

参加者13名

担当者の所見：お茶会でお抹茶をたて穏やかな雰囲気の中で楽しむ。桜餅をととても喜び、心静まると話す。ここは小高地区原町地区請戸の方もおられ、津波で家を失い、放射能で追われた方々、孫など小さい子がいるのでこの地に避難したことを話す。涙し複雑な心境をのぞかせた。また、横川姉の肩や足のマッサージの奉仕と歌やお手玉などで心とむひと時も持つことができた。神様に感謝。



2月22日(金) 「陶芸教室」小池長沼仮設住宅 pm1:00~3:00

参加者9名

担当者の所見：抹茶わんを造る。粘土を簡単な方法まとめ手回しのロク口を使って楽しみながら形とつくる。感想焼き付け色付けは富澤兄が仕上げしてくれることになった。お茶の交わりとゲーム、宮崎師たちのうたのプレゼントがあり、和気あいあいの中で再会とお茶会を楽しみにされた。神様に感謝。



3月14日(木) 「お花カフェ」 pm4:00~ 新地がんこ屋仮設住宅

参加者 19名

担当者の所見：母親2名とヘレンさんの話し合い。涙しながら子どもを守るため健全に育てるための相談をしていた。ダイアンさんと数人の男の子一人の女の子がゲーム的な話をしながら楽しむ。後藤も7名の子どもたちとゲームや話し合いをする。再会を約束した。

3月15日(金) 「お花カフェ」 am10:00~ 大野台第6仮設住宅

参加者2名

担当者の所見：荒さんと小山さんという2名の男性が来る。荒さんは病気がちで兄弟たち仮設にいる。2人とも仕事がない。できないと言っている。カウンセラーが対応する。

3月22日(金) 「健康相談会」 pm1:30~ 小池長沼仮設住宅

参加者11名 (男4、女7)

※相模原牧師会から看護師2名が派遣される。

担当者の所見：人は皆痛みや苦しみ(ストレス)がある。環境が変わればそれぞれ身体に影響を受ける。血圧測定や健康相談を時間をかけて聞き入りアドバイスを受けていた。葛西師の健康講和も絵いりで好感がもたれた。楽しく、重く相談を受けていた。

3月23日(土) 「健康相談会」 am9:00~ 柚木仮設住宅

参加者4名

担当者の所見：一人ずつ血圧測定、相談を6~7分で回る。葛西師が健康講和で導き、楽しいお茶会となる。それぞれ自分の健康チェックをする。参加者の阿部さん、木幡さん、鈴木さん等とても喜び、会話のなかで、痛みを分かち合っていたように思う。看護師さんたちはよいケアとアドバイスをしておられた。一人の方の息遣いが気になるといういたがみなと話すときは落ち着いていて安心された。

3月23日(土) 「健康相談会」 pm1:30~3:00 大野台第6仮設住宅

参加者 4名

担当者の所見：土曜日ということで集会場はお休み状態だったが 血圧を測ったりおしゃべりをしたりして楽しく過ぎた。 仮設の方はお酒を飲んでいたりして辛さや寂しさを紛らしているようだ。自治会長さんは飯館に戻ることは何年先かわからない。2年から4年とも言っているが、皆一緒に戻ることができるように話し合っているといわれた。放射能の除線は遅々としていくことが話題となった。

3. センター・オフィスによる支援活動

3-1. 支援者による会議の開催

下記の通り、仙台圏に本拠地を置く支援者の会合を開催した。

1月23日（水） 13:30～15:30

日本聖公会 いっしょに歩こう！プロジェクト会議室にて

参加団体：日本国際飢餓対策機構、日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオ、東北ヘルプ

2月26日（火） 13:30～15:30

日本聖公会 いっしょに歩こう！プロジェクト会議室にて

参加団体：日本聖公会「いっしょに歩こう！」プロジェクト、
日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオ、東北ヘルプ

3月21日（木） 13:30～15:30 東北ヘルプ事務局にて

参加団体：南三陸を支えるキリスト者ネットワーク、
日本基督教団兵庫教区被災者支援長田センター、東北ヘルプ

3-2. 世界への情報発信

下記の通り、日韓教会交流及び宣教協力増進ツアーを企画実行し、被災地の状況を報告した。

日程：

2月15日（金）

午前7時～9時 礼拝と日韓宣教協力増進フォーラム（場所：セムナン教会）

午後8時～10時 諸教会で深夜祈祷会に参加奉仕。

午後7時～9時 5名でのアジアACF聖会奉仕

2月16日（土）

午後5時～8時 5名は京機道 信興専門大学講堂チャリティコンサート奉仕

2月17日（主日） 午前・午後 ソウル市内各教会に礼拝出席して証報告及び感謝

参加者：被災地の牧師14名



礼拝と日韓宣教協力増進フォーラム（場所：セムナン教会）

4. 今後に向けて

4-1. 各センターにおける支援活動

各センターの働きを継続し、新年度の計画を策定する。

4-2. センター・オフィスにおける支援活動

- a. WCC釜山大会において情報を発信するための準備を進める。
- b. ローザンヌ運動および世界福音同盟ソウル総会への参加が可能となる道を探る。
- c. 各支援センターの情報を統括し国内外の募金活動へつなげる。